



縹縹令（こうけつ・りょう）はステップスギャラリーで、順調に個展を重ねている。縹縹は今回、コンセントを用いた 18×14cm の作品 24 点を画廊内に、これまでの活動を示すため過去の作品 6 点を事務所に飾った。

ギャラリー内で、同一サイズの作品が並ぶ。その全てが、全く異なる表情を浮べていることが楽しい。画風が多彩である、ということではない。コンセントからのイメージが広がっている、ということでもない。

これら作品の全てが一体となって作品を形成しているのが、縹縹の今回の展覧会の特徴である。それは、時代の多様性を表わしているということもできよう。オリジナルの発想など、既に消失してしまっているのかも知れない。縹縹のコンセントの作品を見ると、スマートフォンのケースに様々な絵が描かれ、店頭や web 上に並んでいる姿と比較することができる。

莫大な数に昇るスマートフォンのケースから、消費者は本当に自らのお気に入りの商品を選択することが出来ているのだろうか。とりあえずこれなら他人に笑われないからいいという、消極的な理由が想像できないか。

商品は代わりが利く。利くというよりも、利かなければ商品ではない。私は日暮里駅のセブンイレブンで生の花が売られているのをみた。墓参り用であろう。美術作品もこのように気楽に売れないものかと考えた。

すると、墓の花はその後枯れる。花ではなく、贈り物ならどうだろう。お歳暮など数が多ければ、知人友人に渡るであろう。美術作品がそのような運命に巻き込まれていいのだろうか。高級品扱いでなくとも、そうはいかない。我々が持つイメージとは何だろうか。オリジナルとは。今日、この時代に溢れている商品と美術とは。そのようなことを、私は縹縹の作品を見て自己の課題とした。

